

書評

小椋 力 著

沖縄の精神医療

西園昌久

沖縄は日本人の良心を問うている。それが本土復帰直前とその後の若干でも沖縄の精神医療を垣間見た評者の実感である。

著者は戦禍が残り、本土復帰後の社会変動の激しい中で誕生した琉球大学医学部の精神科初代教授として赴任し、沖縄の精神医療の改善向上に尽力し、退任後の今もそれを続けている人である。

内容は、第一章 沖縄県の概要から始まり、沖縄県の医療の歴史、沖縄の民族信仰とシャーマニズム、沖縄の精神医療の歴史と現状、沖縄における地域精神医療の歩み、沖縄における予防精神医療の歩みと続き、第七章 沖縄の精神医学・医療における国際交流で終わっている。さらに巻末に、沖縄県の精神医療に関する年表が記載され、読者の便宜が配慮されている。科学あるいは理念としての精神医学は万国共通であろうが、その実践としての精神医療はその国、あるいは地域の歴史、文化、習慣、法律、経済事情、住民の理解、さらには社会変動と深く関わるものである。本書では上記の章立ての内容にみられるようにそれらを的確に把握して記述されている。しかも、沖縄のみならず、必要に応じて日本全体、さらには外国の統計資料を駆使し理解を助けている。したがって、沖縄の精神医療を論じながら、日本全体、そして世界の精神医療の動向もが明らかにされている。

沖縄戦の犠牲者は、日米の軍関係者は別として、沖縄住民、十数万人といわれるから全住民の10%強に相当する。当時、外傷後ストレス

障害の概念はなかったが、「この世が信じられない」という外傷体験を多くの住民が体験したことは想像できるところである。本書の中で、本土復帰前、「精神衛生実態調査」が行われ、その結果、精神障害有病率は本土の約2倍に相当するとされたことが明らかにされた。それは、沖縄戦によって住民が受けた心的トラウマと無関係でないであろう。精神医療の決定的不足を補う「派遣医制度」、復帰後の精神科病床ならびに精神科クリニックの急増が数字を挙げて明らかにされている。そのような精神医療の充実の進んだ時点で著者はその動向にある種の危惧を体験された模様である。

その後、著者は琉球大学精神科の診療ならびに研究活動として、予防精神医療を始められたことが明らかにされている。同教室の研究成果のみならず、国際交流、国内における予防精神医学の主導、その後の発展が記載されている。それは、著者が精神科医になって間もなく、派遣された精神科病院での原体験と深く関わっていることが読みとれる。本書は読みながら、精神科医としての自分の立ち位置を内省させられる内容を含んでいる。そして、沖縄戦で戦死された著者のご尊父への鎮魂の報告書でもあらうと思われた。

(心理社会的精神医学研究所)

●四六判 220頁 2015年6月 定価:本体
3,800円+税 中山書店刊